冬祭り

秦恒平

冬祭り

秦 恒平

講談社

冬祭り

昭和五十六年五月二十五日　第一刷発行

著　者　秦　恒平
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定　価　一五〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© 秦　恒平　一九八一年 Printed in Japan

0093-183655-2253（0）　（文1）

目次

第一章　ロシアへ　7
第二章　バイカル号で　35
第三章　津軽の海を　63
第四章　ナホトカから　90
第五章　ハバロフスク経由　116
第六章　雨のモスクワ　142
第七章　ルサールカ　169
第八章　再会　197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九章　そして一週間……　226
第十章　黄金の秋　255
第十一章　冬のことぶれ　283
第十二章　提案　311
第十三章　ひまつりの山へ　338
第十四章　みごもりの湖へ　365
第十五章　愛しい日々　394
第十六章　冬祭り　423

装画・題字　堀　泰明
装幀　辻村益朗

冬祭り

第一章　ロシアへ

蟬籠に山葡萄と河原撫子を挿した。床わきの明りとりへ幾重にも青もみじが繁って、真夏の日ざしは、うわ葉に照り、した葉に透きぎらきら炎える。すこし太ったすはだに甚平をゆるく着て、机へもどりながら、妻の足音を聴いた。

「ミスター当尾宏ですって、本名よ。珍しいわネ」

めったに手にしないエアメールだが、心待ちのそれと見てすぐ封を切った。差し出しK・の大文字が相違ない牧田欣一の名前を示している。うなずいて、手ざわりかるい四つ折りの洋箋二、三枚を、もう広げていた。大きなジェット機がとぶ緑っぽい切手の端に、CCCPという文字も目にたった。

拝復

貴信、七月十日に拝受、残念ながら、——

横罫に一行おきのつよい筆づかいで、貴兄のことは筆名しか、それも作品は知らないとまずことわってある。東京・鍛冶橋に事業本部のある商社の、牧田氏はモスクワ勤務だった。

ソビエト作家同盟との交換訪問のはなしは自分も以前から知っている。貴兄がその任に当たられたとはまたない好機、ぜひ思いたたれるようお勧めしますと、手紙は旅の参考書まで一、二あげ、たとえば「アルメニアのエレヴァンやグルジアのトビリシなどが、面白い。シルクロードへは日数が不足でしょう。九月はよほど冷えこみます。厚手のセーターや下着を用意されると良い」など、懇切だった。

小生への連絡は同封の名刺で、到着後にお電話下さい。通じない時は自宅343―2680の家人あて、ホテルのお部屋の電話番号をお伝え願います。十分にとは、いずれ望めぬことですが、作家同盟のアレンジならスムーズに行くでしょう。貴兄の今後にこの旅行の役だつよう、祈ります。

敬白

読みかえすともなく、しばらく文面を眺めていた。モスクワに、一人なりと緊急に連絡のきく人がほしかった。出発はまずナホトカむけ横浜港を九月六日、同行の作家三人ときまっていて、ロシア語はだれもできない。新制高校の創立三十年を祝う同窓会の会報で、「三回生」牧田欣一という見知らぬ先輩のはるばるの寄稿を見すごしていたら、そもそも訪問地をともあれソ連側に希望するにせよ、エレヴァンとかトビリシとか思いつくわけもない。

京都に住む会の幹事役に急いでモスクワの住所を調べてもらうと、旅だち前からもう恥のかき捨てに躊躇なく牧田氏に手紙を出した。その返事だった。おりよく、文芸家協会の世話で訪ソの三人が初対面の日でもあった。団長格が七十近いお年寄り、もう一人が女の作家と聞けば広いソ連で、どうなるかと危ぶむのは妻にしても同じ気持ち、手渡された便箋を封筒へもどす手つきがふと思案にあぐむと、つぎつぎに、返事のしようもないレニングラードやキエフの天気の心配をしたり、帰りは、いっそ一人シベリア鉄道に乗せてもらったらなどと言いだす。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――チャイムが鳴り、妻は席を起った。
そろそろ着がえるか。赤青はでにふちどった封筒を、また見やって、話のたねに協会へ持参する気になった。そしてもろ手を机に、よいしょと、立ち腰から顔は手紙へ近寄せて、
「……」
右あがりにK・MAKITAと勢いいい大文字が並んで、殿の、Aの横棒がびゅっと飛びでた端に、ちょうど小さな十字を描くぐあいに、インクの汚れでない、たしかに鉛筆で、短い縦棒が書きくわえてある。
「冬ちゃん……」
声をのんで、坐椅子へ尻から落ちた。
冬子にしか書けない、いささかあどけもない4とは、安曇という彼女の旧姓を生かして、もう、おおむかし、人目を忍んだそのままの合図だった。
どんな状況で投函を頼まれたものか、ついでを求めてきわどく鉛筆を使ったか、とっさの判断に敏い冬子の瞬時をはしるような眉から眼もとが、息づかいもありあり蘇ってくると、苦しさとなつかしさに衝きたてられ、縁側に出た。素足を置いた沓ぬぎの石がほてっていた。蟻が二匹、せかせかと指を渡ってふくらはぎへ回りこむ――。
冬子が人妻であるのは致しかたなく、手の届かぬ処へ行ってそうな気はしていた。が、面倒見のいい順子にしても、姉が嫁いだ先の苗字すら洩らしてくれなかった。訊きもしなかった。
同窓会の幹事から、牧田氏が当時軟式の野球部で名サードで鳴らした人と知った時も、そんなら吉さんの先輩か――としばらく逢わぬ野尻吉男の、「冬ちゃん」のこととなるとどんな口封じをされているのか、話をそらしてしまう顔を想いうかべた。だが彼のあの従妹が、まさか――「遠い露都よりのご挨拶」を母校へ送ってきた人の、妻とは。
苦い気持ちで4の十字を見つめていた。縦の棒が一本なのはどう翻訳してもよく、逢いたい、元

気です、好き、賛成など、進むもひくももろもろ〝共感〟を伝えていた。二本にふやすと不機嫌です、いやですの意思表示に変わる。双方に連れのある不意の出逢いにとっさに指を立てたこともあった。みな二た昔も前のはなしだった。

起って「鴨東」の同窓会報をものの下から引き抜いてきた。笑止なことに、「モスクワの四季」と題された四段組ちょうど一ページ分の牧田氏の文章を、読んでもいなかった。末尾の括弧内に社名と〝モスクワ支店、支店長〟とある、それだけ見て、即座に京都へ問いあわせを書いたのだ、それきり会報はしまいこんでいた。

立ったまま一度読み、坐ってもう一度読んだ。「妻も卒業生で」といった一行くらい有るかと危んだが、異郷の四季をただ描写して紙数は尽きていた。

書きだしに、開校三十周年ともなれば「親子で出席」の同窓生もあろうことと想像してあり、胸をつかれた。こちらは、娘をこの春大学に進ませている。結婚がいつだったのか、二つ若い冬子に年恰好の近い娘か息子がいて不思議なかった。轟ッと、眼の底に、白い風が立って冬子の懸命な幼な顔が声かぎり呼ぶ。藍色にひとりうずたかい阿弥陀ヶ峰が夕雲の空に浮かんで見えた。清閑寺境内のもみじというもみじがさながら虚空を染めて苦集滅道を西へ、安曇の家の方へ吹き流されて行く。その音がさらさら、さらさら耳の奥で鳴る——。

秋——は九月の初旬から忍び寄って来ます。春の訪れと同様、あっと思うまに紅葉というより大半が黄金色に変わる落葉樹、プーシキンをして「ザラターヤ・オーセニ（黄金の秋）」と歌わしめた見事な光景です。やがて来る冬将軍の斥候の役目を果たしているようです。紅に黄に燃えたつ枯れ木を早いうち折ってブケットにしておくと、冬のあいだ部屋のなかを飾ってくれます。

そんな部屋で、もう幾度めの秋を、冬子は迎えるというのか。手紙がじかに夫の手へ届いては、

動じない彼女もさぞ胸を鳴らしただろう。
――勝手口での応対をすませた妻が、移る時刻を気にして、着がえの手伝いにもどって来た。ほとんど袖のないワンピースの色柄がさざ波立って淡い。
家のなかが静かだった。姉娘も、六年生の弟も遊びに出ていると妻は言い言い、
「よかったワ……」
露都の先輩のことをそう思うらしく、鸚鵡がえしに返事して、起ってグリグリッと両肩をうしろへねじた。躰がかたい。
小鳥の声を追ってのっそり庭を渡りながら、白黒のぶちの猫が、母娘で、言いあわしたようにこっちを見る。たたきつけるような日照りだった。立っているだけで汗がふいた。
航空書簡をまた一、二通買っておくように言い、家を出た。
駅へ十分、の途中大きな銀杏と欅との杜を抜ける。蟬しぐれをしばらく身にあび、わけもなく「さて」「さて」と呟けた。冬子の手をへた封書は、二つ折りに胸にしまってきた。
用箋のうえへ漢字で刷った商社の名前に憶えはある。が、冬子の夫は、吉男らの口ぶりから転勤の多い、とにかく普通の銀行勤めだった気がしている。どんな事情が重なるとそれがモスクワ駐在の商社マンになり変わるか見当もつかぬまま、ソ連などへ旅だつ煩わしさをつい忘れている自分に気づくと、笑えた。
駅の手前で電話ボックスの重いドアを引いた。
あてにしてなかった吉男が、いきなり電話口に出た。
「なァんだ。ヒマそうやないの」
「お前か」
吉男ははじけたように笑う。
「ごアイサツだな」

「わるいわるい。しかし、なんとなくお前はおかしィとこ有るからさ。ホント」
電話口のむこうでも思わず笑い声がしていた。ながく職場にいたし、不意の電話が奇妙におかしくてならない時のこともわかる。
「ばァか。そィじゃ、もひとつ嬉しがらせるから、ヒマついでにあとで逢わんか」
「ヒマなもんですか。いいよ、でも」
九段にいる吉男とは、三番町の、ひっそりした外務省筋のホテルのバーでいつも逢う。六時ときめた。会合の場所からも、遠くない。
「モスクワへ行くよ」
「そやってな」
「だれに聞いた」
「……新聞」
じゃ、あとでと電話を切った。

——吉男の家へは、幼かったむかし手習いに通った。
彼の母が変わった先生で、人の読みくだせない字など書かんでよろしと躾けられた。
手本なしに思ったとおりを、たとえば「来る途中建仁寺さんで、けつまずいてこけました。人が見てはった」などとまず書かされ、それを当座の話題にしながら手直ししてもらう。そして同じ言葉を幾度も筆で書く。気が乗らねばなるべく短く言い、時にながながと書いた。型破りなためか生徒は、大人も子どももすくなかった。
安曇の姉妹も、馬町の自宅から六波羅の野尻叔母の家へ、習字に通って来るようになった。冬子が女学校の二年生、妹はまだ小学校五年のお河童だった。どの道を通っても、葉桜がはんなり紅い時候だった。

野尻で逢いはじめて間がない雨の日に、筆を立てて一心に冬子が書いた言葉は忘れない。

ゆうべ小松さんのお父さんがなくなりました。お気の毒です。おそう式はあしたです。死んだ人はしやわせです。

国家安康の釣鐘で名高い方広寺大仏の正面に住むその友だちとは、たまたま名前が冬子、秋子とならんだのも手伝って、ことに仲良く、つと襲った親友の不幸を冬子がこう書くのは自然だったが、吉男の母が、「や」を「あ」と直した、死んだ人は「しあわせ」という思いようは、思わず人の口を封じた。

死なれた者はたまらない——つまりそういうことを冬子は言いたかった。

「そらそやわ。死んでもたもンは土にならはるだけで、何も感じィひんやろ。死なれた方は、かなん。ソラかなん。お嬢ちゃんようわかったはる」

居あわせた、心もちがらのわるい小母はんがそう相槌をうちうち帰って行ったあと、へんに、気がふさいだ。にがてな話題だった。

「まいにち、雨が降って、いやです」と、太い筆を畏れげなく使っていた五年生の順子が、卒然と異を立てた。

人は死んだあとも此の世のことは「全部」見えている。残された者にはあの世が皆目わからない。比較して、だから死んだ人のほうが幸せ、なにもかも彼岸から見透かされて生きねばならぬことを、

「死なれたもンの生き恥いうのやテ、お母ちゃん、そう言うたはります……」

「そうかて、死んだらしまいや」と吉男は筆をおいたきり、意外に神経質に声を高めた。うなずけた。

だが冬子はかまわず「しあわせです」と書きつづけ、先生も黙っていた。ほっと血の色がさした冬子のかすかに窪んだ耳たぶから頸がうるんで白いのと、ふっさり髪の黒いのとが匂うように眺められた。初めて知る心ときめきであったやも知れず、死についてものを言うのもあの日が最初だった。幼い順子ですら日ごろそんなことを思いめぐらすらしいのに愕いていると、吉男の母が感想を求めた。

感想、というのではなかったが——幼稚園まえやった思います、と幼い話をした。この野尻の家から坂道を東へ二分とかからない六道参りの珍皇寺で、地獄迎えの撞き鐘を、泣き喚くような熱気のなかで大勢で撞いたことがある。鐘は花頭窓一つの鐘楼にかくれて見えず、丸い穴から撞木を引く綱だけが出ていた。それへ蟻のように人がたかって引くと堂のなかがゴーンと鳴った。鐘の下に地獄へかよう穴がある、と聴いた畏ろしさのまま、次には亡者たちが六道の責め苦におうている絵を、背を押され押され食いいるほど見つめるうち、とうとう泣いた。世界戦争になり、国民学校へあがってからも一人早く寝床へやられると、まっくらな天井の闇を見あげたなり、死ぬべく定められた命がおしまれ、こわくなって泣いて大人をよくおどろかした——。

おどろいたのは、だが、そんなおさない自分の思い出話にではなかった。聴いていたやっぱり順子が、また無造作に異を立てたとたんカタッと筆を硯箱において、向きなおりざま、冬子が妹の頬を打った。膝が浮いた。

「死ぬのンて、うち、ぜんぜん怖いことあらへん」

順子は可愛らしいくらいいっそキョトンとした口ぶりで、そう言ったのだ。それを、冬子がああまで赦さなかった真意を、彼女の叔母も従兄もなぜか声高に問いつめられなかった。その後も、あの折檻についてだけ、なぜかタブーのように、訊けずじまいだった。

あしたその「小松さん」の家のお葬式に行くかと訊かれ、冬子は、日曜日でもあり親しい七、八人が担任の先生の引率でおまいりしますと、叔母に対してもはきはき返事する。梅雨寒むだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com